

子どもの性別・発達段階で異なる父子家庭の父親の家族ケアの困難性 (I)

－ 6名の父親の語りにおける計量テキスト分析をふまえて －

Difficulties in Family Care by Single-Fathers According to the Different Genders and Developmental Stage of Children (I)

－ Based on the Quantitative Content Analysis of the Narratives by 6 Fathers －

浅沼裕治*

Yuji ASANUMA

要約

本稿は、父子家庭の父親の語りにもられる、自身が育てる子どもの性別および発達段階の違いによる家族ケアの困難性を明らかにすることを目的とする。分析方法としては、計量テキスト分析を採用し、語りの内容をKH coderにて解析した。これまでの父子家庭研究においては、父子家庭の「父親—子ども」というカテゴリーにおける支援が模索され、子どもの性別や発達段階を考慮した支援内容については考察がなされていない。本稿での分析の結果、これらの点について父親が家族ケアを行う際に抱える困難として、顕著に発現するものであることが示唆された。そして、こうした諸点を考慮に入れた支援施策の構築がなされる必要性が提示された。

Abstract

This paper aims to clarify the difficulties in family care due to the different genders and developmental stage of children raised by single-fathers, as told by the single-fathers themselves. The analytical method used was the Quantitative Content Analysis and the content of the narratives was analyzed by KH coder. Research into single-father households until now has sought support in the category of "father-child" for single-father households, and consideration had not been given to the content of support which considers the gender and developmental stage of children. In this paper, it is implied from the opinions expressed, that these points are notable as the difficulties single-fathers face when carrying out family care. The need to build support measures taking these various points into account was indicated.

キーワード:

父子家庭、子どもの性別、子どもの発達段階、家族ケア

Key words:

Single-Father Household, Gender of Child, Developmental Stage of Child, Family Care

1. 問題の所在

日本において1980年代以降、離婚件数の増加等にとともに、ひとり親家庭¹⁾となる世帯が増加している²⁾。ひとり親家庭に関する研究のうち、父子家庭に関するものは母子家庭のそれと比べ蓄積が少ないが、1980年代の後半より広がりが見られるようになってきている。こうした先行研究

を概観したところ、ひとり親家庭のうち父子家庭における父親のひとり親となる前からの就業継続と、家族ケア(家事・育児)との両立の困難性については指摘がなされているが、これらを両立させる中において、自身が育てる子どもの性別および発達段階による就業継続と家族ケア困難の実態については説明がなされていない。とりわけ、父

*本学専任講師

子家庭の父親が自身とは性別の異なる女兒を育てる困難性については、その指摘はなされているものの（川崎市男女共同参画センター 2015）、具体的に父親はどのような困難を抱えているのかについては考察がなされていない。

父子家庭の父親が抱える問題とは、現代においても性別役割分業意識が先進諸国の中においても強固な日本社会において（cf.松田 2007）、家計の支え手としての役割に加え、一般的にはひとり親となる前には希薄であった家事の主体的な遂行と、子どもを育むケアの与え手としての役割を同時に期待されている点にある。しかし、ひとくちに「子育て」といっても、子どもが幼児期にある父親と、学齢期にある父親、あるいはそれ以上の年齢にある子どもでは抱える困難が異なることが予想される。また、学齢期の子どもを育てる父親においても小学生、中学生、高校生それぞれの子どもを持つ親の抱える困難は異なることが考えられる。さらに、子どもの性別の違いによって、父親が抱える家族ケアに関する困難の質が異なるのか否かについても考察がなされる必要がある。

そこで本稿は、こうした問題意識に基づき父子家庭の父親の語りによって得られたデータに基づいて、子どもの性別および発達段階の違いによってそれぞれどのような子育てに関する想いや困難を抱えているのかについて考察を行うことを目的とする。

2. 父子家庭に関する先行研究の概要

核家族化および地域社会の連帯が希薄化している現代日本社会において、国が政策的にひとり親家庭への支援を行う必要性が高まっていることが指摘されている（高橋他 1994）。先述のように、日本において父子家庭に関する研究は、母子家庭のそれと比べ蓄積が少ないが、1980年代後半以降、主に父子家庭間の階層性や父親のジェンダー規範、職業役割と子育て役割に関しての研究がみられるようになってくる（春日 1989、高橋他 1994、杉本 2004、橋口 2007、岩田 2009、岩

下 2013）。

こうした先行研究を概観したところ、ひとり親家庭のうち、父子家庭に特有の課題である就業継続と家族ケア（家事・育児）をめぐる課題のうち親族の家族ケアへの関わりの実態、そして親族による家族ケアの提供が受けることができない父子世帯に対する社会的支援について解明がなされていないことが明らかにされた（浅沼 2016）。

さらに、海外の父子家庭研究においても、例えば Esbensen (2014) は、米国のシングル・ファーザー 14 名に対するインタビュー調査の分析を行う中で、現代においても家庭役割をこなそうとする父親の多くはヘゲモニックな男性性を内面化しているがゆえに、家族ケアを行うことに男性性のアイデンティティの揺らぎを感じることを明らかにしている（Esbensen 2014）。米国においても男性稼ぎ手役割意識が未だ根強い状況下において、仕事と家族ケア（家事・育児）の両立を父親がひとりでこなすことの困難さが論じられている。「シングル・ファーザーが日常生活において仕事と家庭生活とのバランスをとることは（調査を行った）多くの父親にとって多大な困難を伴い、孤独やストレス、自己犠牲の生活を強いるものだった」（*ibid.* 2014: 126）。

また、Hook らは米国の生活時間調査を用いて量的な分析を行い、ひとり親家庭の父親は、ふたり親の母親よりも家事・育児時間は若干少なくなるものの、妻がいる家庭の父親よりも多くの時間が割かれていることを明らかにしている（Hook *et al.* 2008）。

米国においても、シングル・ファーザーは一家の生活を支える存在として仕事と家事・育児の両立において多くの負担を強いられるものとなっていることが現状としては指摘ができる³⁾。こうした状況において、父子家庭の父親が抱える問題は、ジェンダー構造の影響もあり就業継続を主体とした生活設計を行った場合に、子どもに対するケア（生命再生産労働）（後藤 2012）が不十分にしか与えられていないことが懸念されている。そして、父親がひとり親であるがゆえに抱える子ど

もの性別および発達段階の違いによる困難についての考察が必要となっているものとする。

3. 調査方法

本稿では、これまでの先行研究の成果を踏まえて、父親自身が育てる子どもの性別および発達段階の違いによる父子家庭の父親における家族ケアの困難性を把握すべく、父子家庭の父親を対象とし、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。質問項目は、ひとり親となった契機、子どもの性別および年齢、調査協力者が就業している場合には仕事と家庭生活の両立状況、家庭生活における家族・親族の協力状況、相談相手の有無、子育てに対する想い、社会的支援制度の利用状況、今後の人生設計などである。

調査対象者はスノーボール・サンプリング法により募り、6名に対して筆者がインタビューを行った。インタビューは一人につき一回、個別面接形式で行った。インタビュー場所は調査協力者の自宅もしくは職場においてプライバシーが担保された環境を設定し実施した。対象者一人に対するインタビューの所要時間は50分から90分である。

ひとり親となった契機は全員、離別であり協力者の住まいは東海地方である。また、子どもの性別と発達段階（学齢）に応じた考察を行う本稿の目的に従い、子どもの性別を考慮し、調査時点で子育てを行っており、幼児期・小学生・中学生・高校生・大学生の子どもを持つ父親をバランスよく抽出した。

インタビュー内容は調査協力者の同意を得たうえで、すべてICレコーダーに録音し、録音データは調査後、逐語録におこした。インタビューの実施時期は2017年9月～10月である。表1に調査協力者の基本属性を示す。

表1. 調査対象者リスト (インタビュー時)

| 対象者 | 本人の年齢 | 同居家族・子の性別・年齢 | 職業 |
|-----|-------|-------------------------|--------|
| A | 30代 | 子(男)11歳、子(女)9歳 | 無職(学生) |
| B | 40代 | 子(男)6歳、子(女)3歳 | 自営業 |
| C | 40代 | 子(女)18歳、両親 | 会社員 |
| D | 30代 | 子(女)15歳、子(男)9歳 | 自営業 |
| E | 40代 | 子(女)16歳、子(女)14歳、子(女)13歳 | 会社員 |
| F | 30代 | 子(男)7歳、両親 | 自営業 |

4. 分析方法

インタビュー調査によって得られたデータは、テキストマイニングにより子どもの性別および発達段階の違いによる父親の家族ケアに関する困難を考察するという本稿の目的に沿って分析を行う。この目的に合致する分析方法として計量テキスト分析が挙げられ、逐語録をコーディングによって数値化したのち内容分析 (content analysis) を行う。

テキスト分析のためのソフトウェアはKH coder (Version 3.Alpha.09 h)⁴⁾を用いる。計量テキスト分析とは、浜崎ら (2017) が述べているように、テキストデータの中から自動的に語りを抽出し、統計手法を用いて探索的な分析を行うもので、それによって語の出現パターンやルール、ひいては新しい知識の発見を目指すことができ、質的データをコーディングによって数値化し、計量的分析手法を適用してデータを整理、分析、理解する方法である (浜崎他 2017:87)。研究者の「規範」や「想い」を基底とした恣意的な分析を排除し、客観的に語りの内容を描き出すうえで有用なツールということができ、本稿の問題意識における目的を達成するために有効な方法であると考えられる。

5. 倫理的配慮

本テーマにて調査／研究を行うことについて、

その内容・目的・方法・結果の公表、個人情報の取り扱い等についてインタビュー調査説明書に記載し、調査協力者に確認／理解を求め、文書にて同意書を取り交わした。

また、本研究は中京学院大学短期大学部研究倫理委員会の倫理審査での承認を得たのちに実施した（承認番号：第29010号）。

6. 結果

6.1 頻出上位150語および共起ネットワーク

まず、調査時点で子育てを行っている父子家庭の父親たちの語りの内容を総合的に把握するために対象の6名の父子家庭の父親の語りを統合し、KH coderにて抽出した頻出上位150語を示す（表2）。

表2 頻出上位150語

| 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 | 抽出語 | 出現回数 |
|------|------|-----|------|------|------|
| 思う | 247 | 一番 | 21 | 実家 | 14 |
| 自分 | 169 | 嫁 | 21 | 小学校 | 14 |
| 子ども | 165 | 週間 | 20 | 寝る | 14 |
| 言う | 140 | 状況 | 20 | 先生 | 14 |
| 今 | 126 | 大きい | 20 | 全部 | 14 |
| 仕事 | 98 | 大変 | 20 | 相手 | 14 |
| 行く | 85 | 不安 | 20 | 別に | 14 |
| 人 | 65 | 父子 | 20 | 母子 | 14 |
| 離婚 | 61 | 変わる | 20 | 来る | 14 |
| 見る | 57 | お願い | 19 | あ | 13 |
| 話 | 57 | 会社 | 19 | ああ | 13 |
| 娘 | 56 | 困る | 19 | パパ | 13 |
| 感じ | 53 | 暮らす | 19 | 家族 | 13 |
| 親 | 53 | 友達 | 19 | 結婚 | 13 |
| 家庭 | 51 | 少し | 18 | 月 | 13 |
| 結局 | 51 | 入れる | 18 | 支援 | 13 |
| 多分 | 51 | 一応 | 17 | 住む | 13 |
| 本当に | 50 | 向こう | 17 | 場合 | 13 |
| 考える | 48 | 施設 | 17 | 洗濯 | 13 |
| 前 | 44 | 児童 | 17 | 特に | 13 |
| 帰る | 43 | 取る | 17 | 買う | 13 |
| 時間 | 42 | 出す | 17 | 不良 | 13 |
| 生活 | 42 | 掃除 | 17 | 両親 | 13 |
| 出る | 40 | 知る | 17 | グループ | 12 |
| 学校 | 37 | 働く | 17 | 受ける | 12 |
| 母親 | 36 | 母 | 17 | 書く | 12 |
| 年 | 35 | 育てる | 16 | 当たり前 | 12 |
| 聞く | 35 | 家事 | 16 | 病気 | 12 |
| だめ | 34 | 経験 | 16 | はい | 11 |
| 一緒 | 33 | 行う | 16 | 育児 | 11 |
| 相談 | 33 | 手 | 16 | 一つ | 11 |
| 保育園 | 33 | 収入 | 16 | 下 | 11 |
| 作る | 31 | 少ない | 16 | 歳 | 11 |
| 入る | 31 | 食べる | 16 | 借りる | 11 |
| シングル | 30 | 当然 | 16 | 上げる | 11 |
| 家 | 30 | 父親 | 16 | 風呂 | 11 |
| 何とか | 28 | あと | 15 | 面会 | 11 |
| まあ | 27 | 感じる | 15 | 問題 | 11 |
| 気持ち | 27 | 関係 | 15 | 連絡 | 11 |
| 結構 | 26 | 再婚 | 15 | 話す | 11 |
| 使う | 25 | 持つ | 15 | お父さん | 10 |
| お金 | 24 | 親権 | 15 | ママ | 10 |
| 終わる | 24 | 全然 | 15 | 違う | 10 |
| 本当 | 24 | 多い | 15 | 休み | 10 |
| ご飯 | 23 | 部分 | 15 | 協力 | 10 |
| 制度 | 23 | 預ける | 15 | 残業 | 10 |
| 子 | 22 | 楽 | 14 | 社会 | 10 |
| 子育て | 22 | 基本 | 14 | 世の中 | 10 |
| 連れる | 22 | 気 | 14 | 探す | 10 |
| お母さん | 21 | 逆 | 14 | 朝 | 10 |

父親たちの語りの中で「子ども」や「仕事」といった語が上位10位以内に入っている。本調査の対象者が全員離別によってひとり親となっていることから「離婚」という語も上位に位置している。これらに付随して「帰る」や「時間」、「学校」、「保育園」といった語が散見される。とりわけ年齢の低い子どもを育てている最中の父親は、仕事と家庭生活を両立させるべく、時間を調整しながら仕事を終わらせ、保育園に子どもを迎えに行き、帰宅するという「生活」を送っている。また「掃除」、「育てる」、「家事」、「食べる」といった家族ケアに関する語の出現度数も高い傾向にある。

次に、6名の父親たちの語りによって得られたテキストデータを共起ネットワークにおいて表した図を示す（図1）。

KH coderにおいて分析の結果、テキストデータにおける頻出語のうち共起関係にあるものについて、6つのカテゴリーによって構成された。

01のグループは「自分（父親）」と「子ども」を中心とするカテゴリーである。02は父子家庭における支援「制度」のカテゴリー、03は家族ケアに関するもの、04は子育て相談・支援に関連するもの、05は元配偶者に関するもの、06は父親自身の「不安」を中心とする精神面に関するカテゴリーとなった。

次に、父子家庭の父親の重要な役割である生計を維持することに関連する仕事に関する語りと、家族生活を維持するために必要な家族ケアの両立に関する語りの分析について議論する。

まず、語りの中で「仕事」に関して出現パターンが似通っている語の関連語検索を行った結果についての共起ネットワークを図に示す（図2）。

7つのカテゴリーによって示された。家計の支え手として「資格」を得ることや「安定」を求める語りと同時に、仕事と家庭生活との両立の面で「家庭」、「子育て」、「学校」といった語のグループ、「家」、「帰る」といった語のグループ、また、仕事「内容」が父子家庭となったことによって「変わる」といったような従前の就業を継続でき

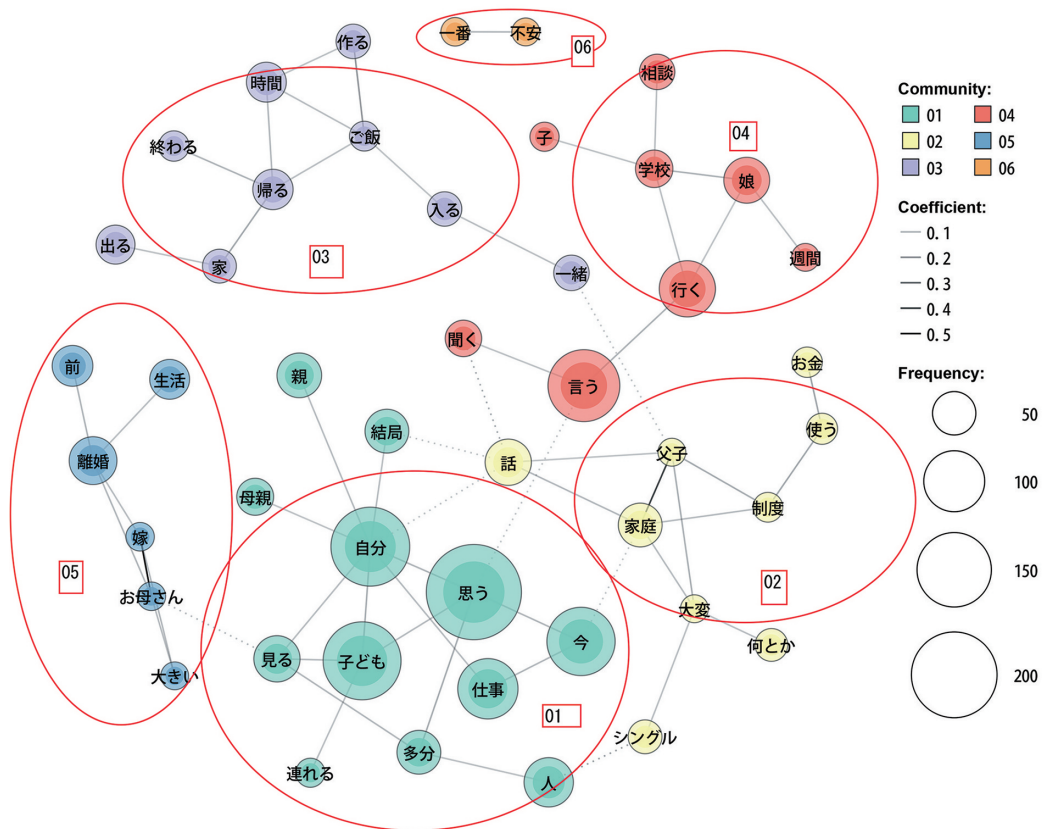


図1 共起ネットワーク

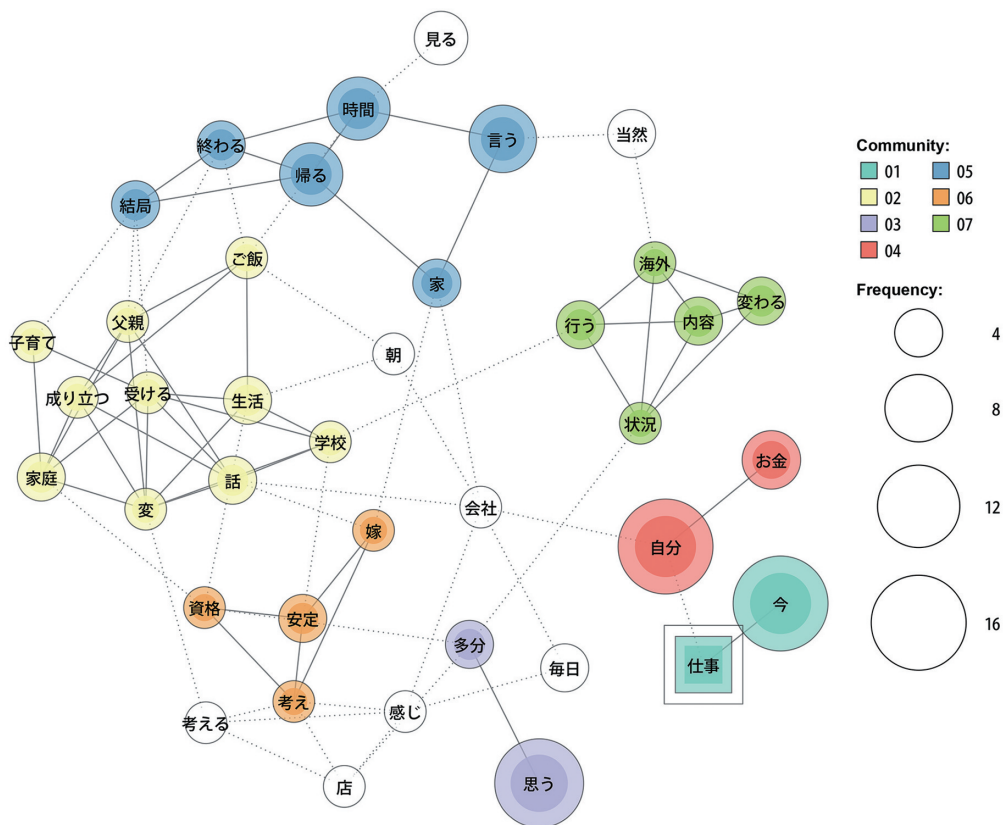


図2 共起ネットワーク (仕事)

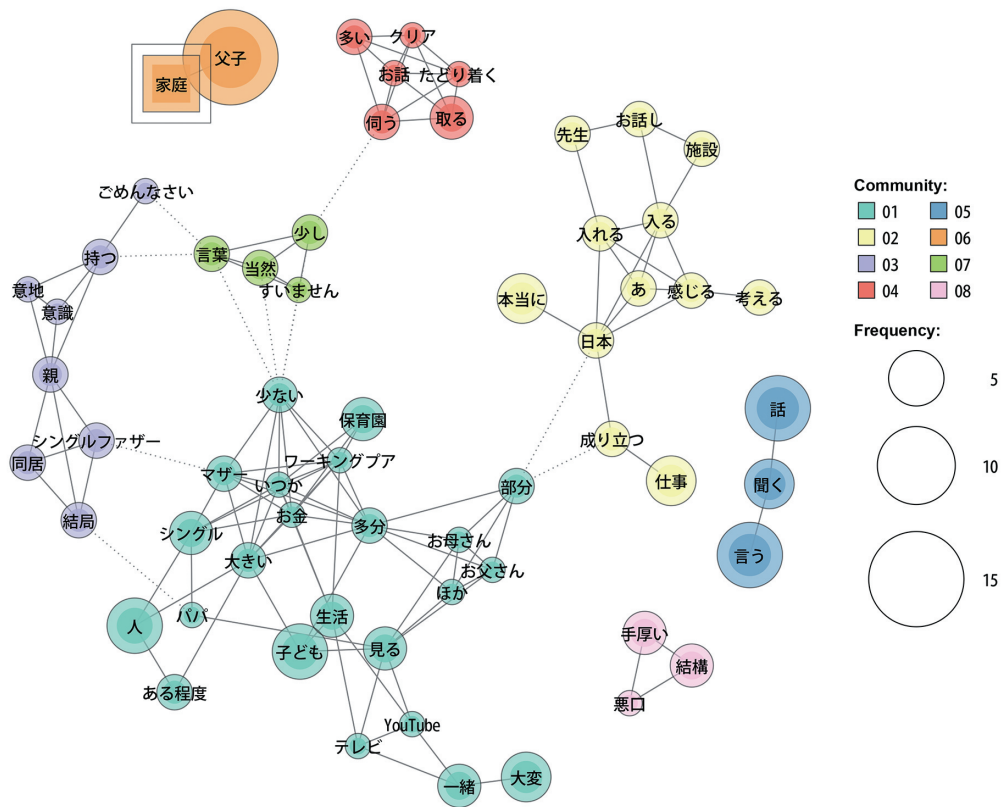


図3 共起ネットワーク（家庭）

なくなった語について特徴的な共起関係が表れている。

続いて、語りの中で「家庭」に関して出現パターンが似通っている語の関連語検索を行った結果についての共起ネットワークを図に示す（図3）。

こちらは8つのカテゴリーによって示された。「子ども」や「生活」を中心としたカテゴリーでは「保育園」、「ワーキングプア」、「大変」、といった語が関連し、「シングルファーザー」、「親」、「同居」という語のグループ、「日本」、「先生」、「施設」といった語のグループなど、「家庭」と強い関連がある語については子どもが通う保育所や親と密接に結びついている語が表れる結果となった。

6.2 対応分析および Jaccard 類似性測度

次に、各調査協力者における対応分析の結果（図4）および Jaccard の類似性測度の結果（表3）を示す。

対応分析の結果では、いずれの調査協力者の語りにおいても「大変」、「家庭」、「家」、「子ども」、「生活」、「時間」といった家族ケアに関わる語についてが普遍的な（特徴がない）語として示されている。また「仕事」、「お金」、「帰る」といった就業に関する語も普遍的な語りとして示された。仕事と家族ケアを両立させている父子家庭の父親の語りとして、これらは最も出現している語といえることができる。以下では、それぞれの調査協力者に特徴的な語として抽出された内容を見ていくこととする。最終的には子どもの性別・発達段階別の違いを明らかにしていくが、手順として主にその子どもの発達段階の違いをみていくことにより、その性別の差異による父親の子育ての困難を照射する。

6.2.1 小学生の子どもを育てる父親（Aさん）

Aさんは、ふたりの子どもがともに小学生（5年生の男児と4年生の女児）である。対応分

析の結果では「子育て」、「保育園」、「制度」、「不安」といった語が特徴的なものとして示されている。

【子育てする不安が強いかなあと。今は子どもが小学校に上がったんで、(子どもの)体調の変化が少なくなったんでいいんですけど、保育園、未就学児のころは不安が強かったですね】(Aさん)。

Aさんは子育てを行う中において、子どもの体調の変化に対する不安が強かったという。パートナーがいないひとり親という立場におかれている中において、急な子どもの体調の変化への対応は手探りであり、そうした不安を相談できる相手がないことで不安が増幅すること、そして、そうした不安に対応してくれる社会的な支援制度の利用が手軽にできることを望んでいた。しかし、子どもたちが小学校に進学するにともない、体調の変化も落ち着き、不安が解消されつつあると述べる。Aさんが必要としているものは、妻がいない中で子育てにおける相談相手やその支援を求めているといえるであろう。

6.2.2 幼児を育てる父親 (Bさん)

Bさんは自営業を営んでおり、インタビュー時点において6歳の小学1年生の男児と3歳の保育園に通う女兒を育てている。Jaccardの類似性測度の結果では「子ども」、「仕事」、「家庭」といった語が特徴的なものとして示されている。Bさんの語りにおいては、とりわけ保育園に通う3歳の娘に関する内容が多くを占める。

【私は飲食業を営んでいますので、料理は基本的にはできるんですね。ただ、裁縫。あれが私はどうやってもできなくてですね、それこそ、保育園の帽子にキャラクターをつけろとか、これがとても苦手ですね。】(Bさん)。

自営業で未就学の子どものも育てている最中のBさんは、親からの家事・育児の支援が得られない状況で子育てを行っている。自営であるために、急に体調が悪くなった場合には勤務時間の融通は利くというが、保育園から要請される裁縫等は苦手であり、インターネットにて検索を行い、その

手順を参考にして対応しているという。

【今、YouTubeとか、SNSとかが非常に発達して、助けてもらいながらやってはいるんです。アイロンのかけ方とか、全部検索すれば出てくるもんですから】(Bさん)。

さらに、子どもの体調の変化についても、対応に苦慮していることを語る。

【先日も子どもが手足口病になったんですけども、それも私、全然わからなくて。ネットで検索すると出てきたんで、それで病院連れてったりとか。そういった意味では(ネット上の情報は)非常に助かっています】(Bさん)。

もちろん、現代ではふたり親の世帯においてもインターネット上において子育てに関する情報を収集することは一般化している現象である。しかし、Bさんの場合にはひとりで子育てをする中において周囲に頼れる親族もおらず、ネットが初めに頼れる子育てに関する情報源ということができるといえるであろう。

さらに、3歳の女兒も育てているBさんは性別の異なる子どもへの対応の困難について以下のように語る。

【また女の子のほうは、最近やっぱ3歳になると、髪の毛を縛りたがるんですよ。そう言われても、私は三つ編みの仕方わかりませんし、それもちょっといろいろまねとか、いろいろ周囲の子どもたちを見ながらやってるんですけども。どうしてもすぐとれてしまったりとか、痛がったりするもんですから、それもどうしたもんかいなあと思いつつ、ちょっと今、悩みというか、勉強しないかなとは思ってるんですけども】(Bさん)。

同性の子どもを育てる場合、父親は自分が辿ってきた成長段階を参照し、子どもの発達段階によるニーズについて対処することが可能であろう。しかし、上記の語りにもみられるように、異性の子どものニーズについては対応することが困難となる。こうした困難は本節のBさんの事例である幼児期の子どもを育てる段階から始まり、後述するEさんの事例のように、子どもが高校生段階になるとより顕在化してくる。性別が異なる子ど

もへの対応は、子どもが成長発達を重ねるにしたがって大きくなる傾向がみられた。

6.2.3 子どもが大学生の父親 (Cさん)

Cさんは調査時点で大学生になる娘と両親とで同居をしている。対応分析、Jaccard類似性測度で関連性が高いものとして現れたのが「親」、「母」、「娘」といった語である。Cさんは娘が2歳の時に離別によってひとり親となった。以降、自身の両親とりわけ母親の全面的な家族ケア(家事・子育て)へのバックアップがあったからこそ、ひとり親となる前から就いていた自身の就業を継続することができたと語る。

【(母は) 僕に手を出さなって言ってたぐらいですから。母、そういう人だったんで。もう、すべて自分でやるから、ほかは手出すなって人間ですの】(Cさん)。

Cさんの語りの中では自身の両親の子育ての関わりの中で、とりわけ「母親」が妻に代わり自身の子どもの母親代わりとなって養育に協力してくれたことに関する語りが多くを占めた。子どもが大学生となった現在では子育てに関する事柄からはほぼ解放された状態であるという。その意味では、Cさんは異性の子どもを育てる困難については母親が対応しているため、自身は特に困難を感じることもなく、伝統的な性別役割分業における「父親」としての役割を果たすことで子どもを成長させることができたと言語する。

6.2.4 中学生の子どもを育てる父親 (Dさん)

自営業で中学3年生の娘と小学3年生の息子と暮らすDさんの語りの中において特徴的なのは、「娘」との関係性であった。対応分析とJaccard類似性測度の結果においても「子ども」、「娘」、「仕事」、「学校」といった語がDさんに関連性の深い語として現れ、「息子」に関する語りに比べ、「娘」に関する比重が高い数値を表している。中でも現在の娘の生活態度に関して多くの苦勞を抱えている。自営業を営んでいるが、仕事が軌道に乗らず、収入面でも厳しい様子も語る。

【今は仕事で稼げないと、思春期の娘のこの悩みが大きいですね。】(Dさん)。

具体的な悩みとしては以下のように語る。

【娘の家出だったりとか。それこそ学校の生活態度とかそういうので児童相談所に相談しに行つて、いろいろカウンセリングとかも受けてたんですけど、それでも、娘の不良への進み具合がだんだんひどくなっていて、最終的には僕が手を上げて、娘に。それが、たまたま学校の先生に知られて娘が児童相談所の施設に送られて】(Dさん)。

自営業を営む中で自宅に子どもを一人でいさせるなど【寂しい思いをさせたかもしれない】(Dさん)と語るDさんは、家計を支えるためには仕事をせざるをえないが、そうした生活を送るなかで子どもたちの生活も乱れがちになったと語る。

むろん、父子家庭の父親が娘を育てる場合、すべての子どもがDさんの子どものように生活が不規則になるわけではない。しかし、Dさんが語るようにふたり親の世帯と比べた場合に仕事と家庭生活を両立させるなかで、子どもに寂しい思いをさせる頻度が相対的に高いこと、とりわけ思春期の娘を育てる父子家庭の父親にとっては、身体の成長や心の問題に寄り添うことが難しいことが挙げられる。

6.2.5 高校生の子どもを育てる父親 (Eさん)

Eさんは高校生(1人)と中学生(2人)の合わせて3人の娘を養育している。両親からの家族ケアに関する支援を受けることができない状況で暮らすEさんは、とりわけ子どもが成長するに伴い性別の異なる子どもを育てる困難を語る。高校生になるEさんの長女は最近メイクに関する事柄に興味を持ち始めたが、こうした一般的には女性特有にみられる興味・関心への対応にEさんは苦慮しているという。

【結局メイクの仕方なんてわかんないじゃないですか、男なんて。眉のかたちを整えるとか無駄毛の処理とかっていうぐらいいいんですけど、メイクはどのようなものをそろえて、どういう順番にやっていくかってわかんないし。(ふたり親の

家庭では) 当たり前にある母親のメイク道具がうちにはないじゃないですか。】(Eさん)。

こうした状況において、娘へのEさんの対応としては以下のように行っているという。

【ドンキホーテ連れてって、女性の店員さんにちょっとごめんなさいって事情を軽く話して、高校生向けぐらいのやつで使い方を聞きながら一通り買って。本人も練習しながら、ちょこちょこ覚えていって何とかなってきたかなっていうふうなんです】(Eさん)。

全体としてEさんと3人の子どもとの関係は良く、コミュニケーションも円滑に行うことができていると語るが、メイクなど一般的に女性特有にみられる興味・関心に関することへの対応については限界を感じていると語る。

6.2.6 小学生の子どもを育てる父親 (Fさん)

一方、自営で小学生の男児と暮らすFさんは自身の両親とも同居している。Jaccardの類似性測度では、他の調査協力者と比べて「店」が関連性の高い語として現れている。先述のAさんについては、小学生の子どもを育てる中で相談相手が周囲にいないことを困難のひとつとして語っていたが、Fさんの場合は自身の両親と同居しており、自宅近くに自営の店を持っている。子育ては両親が積極的に関与し、子どもとの生活も安定しているという。

【仕事終わって帰れば、ご飯も食べさせて終わってくれてますし、お風呂ももう入ってるんで、あとはもう夜はちょっと勉強見たりとかしています】(Fさん)。

子どもの年齢が低ければ低いほど、父子家庭の父親にとって、子育てへの自身の親の関与は就業を継続していく際に重要な要素となるばかりではなく、子育てにおける悩み、不安の相談相手としても機能している。それが叶わない場合は、父親が単独で育児にも参与せざるを得ず、就業継続と家族ケアとの両立が困難を極める場合がある。

7. 考察

本稿では父子家庭の父親における子どもの性別と発達段階の違いによる子育ての困難について焦点を絞り考察を行った。こうした問題意識に基づく調査の結果により、以下の知見が示唆された。

①父子家庭の父親が就業継続と並行して行う家族ケアについて、いずれの父親も積極的に関与しようとしているが、子どもの性別によって、また子どもの発達段階によって家族ケアの困難の要素が異なる。

②とりわけ発達段階が低年齢の子どもを育てる父親は、就業継続とのバランスが取りにくいケースが見られ、自身の親から家族ケアへのサポートが得られない場合は、就業内容が疎かになりがちであり、就業が困難となった場合には貧困へと陥るリスクが高まる可能性が示唆できる。

①の知見について見ていく。

これまでの父子家庭に関する研究で見過ごされがちなことは、子どもの性別および発達段階による子育ての困難さについての差異であった。本稿において、これらの差異がみられることが示唆された。

まず性別の違いについてである。子どもの性別が異なることによって、父親の家族ケアに関する困難が大きく異なる点が見いだされた。とりわけ女兒を育てる父親が自身の親族、とりわけ母親からの育児支援に頼ることができず、父親のみで育児を行う際に、こうした困難が生起することが認められた。一般的に女性特有の指向である「メイク」や「髪を縛る」といった行為に対して父親は親和的な環境にないため、対応に苦慮する語りがみられた。

一方、子どもの発達段階による父親への育児支援についても、保育所や学校との連携によって、また、母子・父子支援員による各種支援制度の利用促進の提言がなされているが、子どもの発達段階ごとの父親への育児支援体制の必要性を示唆できたことは本調査によって得られた独自性ということができる。と考える。

次に②の知見についてみていく。

日本の家族構成については高度経済成長期に確

立された「サラリーマン—主婦型」家族モデルを標準とし夫は仕事、妻は家事・育児（プラス家計への補助的労働）というモデルが構築されてきた（山田 2004）。現在、このモデルは揺らぎが見え始めているといわれているが（矢澤 2012）、実態としては、長時間労働を基底とする「男性稼ぎ手モデル」による「サラリーマン—主婦型」家族役割モデルが一般的である（山田 2004；村田 2011）。

Cさんのケースに典型的にみられるように、自身の母親が妻の立場の代替となることによりCさん自身もひとり親となる前の仕事に継続して就業することが可能となった。また、子どもにとっても「母親」に代わる役割を担う存在が身近にすることで、代替的「サラリーマン—主婦型」家族モデルのもと育つことができた事例といえることができるだろう。

一方、こうした親の家族ケアを受けることができない父親は家族ケアを一手に引き受けざるを得ない状況となり、家計を支えるための就業内容にも影響が及ぶ。

本調査においてこうしたケースはBさんにおいて典型的にみられた。

【(父子家庭になって)仕事面ですと、やっぱり私の仕事がほぼ180度変わってしまったんですね、内容が。やっぱり家事も、当然ながら100%こなさないといけませんし、かつ、仕事もしないと、やっぱり生活できませんので。婚姻中は、年間半年ぐらいは海外を点々と歩き回っておりまして、今の現状になってからは、当然ながら行けないものですから、同僚も私の事情を知ってるものですから、協力はしていただけてるんですけども、収入は減ってしまいましたね】(Bさん)。

両親からの支援を受けることができない環境にあるBさんは育児・家事に関する事柄を一手に担っている。こうした状況において社会資源を利用するために市役所へ相談に行ったが、制度の利用についても条件や制約が多くあり、利用もできない状況であるという。

【条件がいろいろあるみたいで。いろんな条件をクリアしないと、なかなかその制度利用まで

辿り着かないというふうなお話を伺いまして、何度か区役所のほうには、父子家庭でも適用される制度はないかっていうふうなお話をしたこともあるんですけども、父子家庭ですと(母子家庭支援制度の)一部だけは父子家庭もじゃあ中に入って、母子家庭と一緒にの制度へ入れますよというのはあると思うんですけど、なかなか父子家庭に対して日本は応援というか、そういったのはなかなか厳しいと常々感じています】(Bさん)。

母子家庭への社会的支援については経済的支援を中心に充実化が図られているが、Bさんの事例に典型的にみられるような父子家庭のニーズである人的支援については支援制度自体がほぼ整備されていないに等しい状態であることを現状として挙げる事ができる⁵⁾。

8. 結論

今回の調査協力者である父親たちは、いずれも子育てに積極的に関与しようとする姿勢を語る父親たちであった。例えば仕事と家族ケアをひとりでこなしているBさんであっても、子どもを児童養護施設などに預けることには抵抗があるという。【自分ができる限りは、自分の手で育てていきたい】(Bさん)と語る。また、施設利用とまではいかなくとも、社会的に用意されている支援制度を積極的に利用している、もしくは利用したいと語る父親は見られなかった。

対応分析や共起ネットワークの結果をみても、社会的支援制度の利用意向に強い正の相関を示す結果は得られず、むしろ、親族からの育児サポートや、それが得られない場合には、ひとりで仕事と家庭生活を両立させていこうとする姿である⁶⁾。社会的支援(社会資源)を利用しようとしなない最大の理由としては、制度の利用手続きが煩雑であること、また利用する際に年収等で制限が設けられおり、そのことが制度の利用を遠ざけている一因として考えられる。

同時に、子どもの性別と発達段階の違いについても、父親が子育てを行っていく中で困難の高／

低に大きな要因を及ぼすことが示唆された。したがって、父子家庭の父親への支援を行う際には、これらの2点を踏まえた制度設計が必要となることが考えられる。

9. 今後の課題

本研究で得られた調査結果を分析することを通して、父子家庭の父親と、そこで育つ子どもの福祉を考察するにおいて、子どもの性別および発達段階を考慮した支援施策を考察するための基礎的なフレームワークの示唆を得ることができた。これらを踏まえ今後の課題として、以下の3点を挙げる。

第1の課題は、父子家庭における子どもの性別・発達段階を考慮した具体的な支援のあり方についてである。これまでの父子家庭研究においては、父子家庭の「父親—子ども」というカテゴリーにおいてのみの支援が模索され、子どもの性別・発達段階を考慮した支援内容については等閑視されている傾向にある。これに対して本稿は子どもの性別や発達段階を考慮に入れた支援内容の模索がなされる必要性を提示した。今後は具体的にどのような支援施策を策定していく必要があるのかについて明らかにする必要がある。

第2の課題は、調査のサンプルサイズの増加およびサンプルの多様化である。本稿での調査対象者は離別経験者のみであった。しかし、例えばこれらが、死別により父子家庭となった場合に就業継続や家族ケアに関して困難の違いがみられるのかについて調査／考察を深めていく必要性を感じている。

第3の課題は、上記の点における母子家庭との比較である。親—子の性別の違いによる子育ての困難があるとするならば、それは母子家庭の母親が男児を育てる際にも生起するものと考えられる。父子家庭の父親が女児を育てる際に感じる困難と、母子家庭の母親が男児を育てる際に感じるそれとの異同について考察を行う必要があると考えている。

これらの残された課題については、今後、稿を改めて考えていくことにしたい。

【謝辞】

本研究の遂行にあたり、インタビュー調査に快く応じていただいた6名のシングル・ファーザーの方々に厚く御礼を申し上げます。

【註】

- 1) 「ひとり親家庭」についての明確な定義はないが、一般的に父親とその子どもで生活している家庭を父子家庭、母親とその子どもで生活している家庭を母子家庭（いずれも祖父母等との同居を含む）、両者を総称してひとり親家庭と定義する（浅沼2015a: 152）。
- 2) 「平成23年度全国母子世帯等調査」（厚生労働省）によると、父子家庭となった理由のうち、離婚によるものが74.3%、死別によるものが16.8%となっている。ちなみに、母子家庭は離婚80.8%、死別7.5%である。また、世帯数は同調査によると、母子家庭が123万8,000世帯に対して、父子家庭は22万3,000世帯と推計され、父子家庭は母子家庭の20%に満たない。
- 3) 加えて海外の父子家庭研究における言説的な考察についてはColes (2015) を、また本稿では詳察することはできないが男性性そのものに関する考察についてはConnell (2005) を参照のこと。
- 4) 樋口 (2014) を参照のこと。
- 5) 母子家庭および父子家庭への社会的支援施策における問題点に関する考察は浅沼 (2015b) を参照のこと。
- 6) また、子どもの年齢が低いほど自身の健康に関しての語りに関連が強い語として現れている。

【一番気にしてるのはやはり体のことですね。私も結構年いってるもんですから、子どもが大学卒業するまで健在でいれるのかなとか、そういったことがやっぱり不安に思ったりとかはしてますね。私も少なからずは風邪を引いたり、体調を崩したりするもんですから。そのときでもやはり（子どもを）お風呂に入れたり、食事用意したりとか、当然、家事は休みないですからね。そういうのがやっぱりしんどかったりとかもあります】（Bさん）。

【文献】

- ・浅沼裕治 (2015a) 「ひとり親家庭等支援施策・DVの現状と課題」星野政明他編『全訂 子どもの福祉

- と子育て家庭支援』、(株)みらい、151-162
- ・浅沼裕治 (2015b) 「父子家庭への社会的支援に関する一考察—母子家庭が抱える困難との比較分析を通して」、『地域福祉サイエンス』2: 123-129
 - ・浅沼裕治 (2016) 「日本における父子家庭研究の動向と支援施策の課題—言説にみる問題の所在—」『福祉図書文献研究』15: 45-53、日本福祉図書文献学会
 - ・Coles, Roberta L. (2015) "Single-Father Families: A Review of the Literature", *Journal of Family Theory & Review*, 7: 144-166.
 - ・Connell, R.W. (2005) "Masculinities: Second Edition" University of California Press.
 - ・Esbensen, R.h. (2014) "Illuminating the Experiences of Single Fathers", *Portland State University Dissertations and Theses*, Summer, 1-141.
 - ・後藤澄江 (2012) 『ケア労働の配分と協働—高齢者介護と育児の福祉社会学—』東京大学出版会
 - ・浜崎隆司・黒田みゆき (2017) 「絵本の読み聞かせがその後の人生に及ぼす影響」、『鳴門教育大学研究紀要』32
 - ・樋口耕一 (2014) 『社会調査のための計量テキスト分析』ナカニシヤ出版
 - ・橋口茜 (2007) 「父子世帯における社会化過程に関する研究」『文京学院大学人間学部研究紀要』9 (1): 163-175
 - ・Hook, Jennifer L. & Satvika Chalasani (2008) "Gendered Expectations? Reconsidering Single Fathers' Child-Care Time", *Journal of Marriage and Family*, 70: 978-990.
 - ・岩下好美 (2013) 「ひとり親家庭の父の家庭役割と職業役割—家庭と職場における役割遂行と資源—」『家族関係学』32: 51-63
 - ・岩田美香 (2009) 「階層差から見た父子家庭の実態」『季刊家計経済研究』81: 59-69
 - ・春日キスヨ (1989) 『父子家庭を生きる—男と親の間』勁草書房
 - ・川崎市男女共同参画センター (2015) 『シングルファーザー生活実態調査報告書』
 - ・松田茂樹 (2007) 「共働きが変える夫婦関係」、永井暁子・松田茂樹編 『対等な夫婦は幸せか』、勁草書房
 - ・村田陽平 (2011) 「キャリアパターンの維持と変容」、多賀太編著 『揺らぐサラリーマン生活—仕事と家庭のはざままで』ミネルヴァ書房、pp.65-98
 - ・杉本貴代栄 (2004) 『福祉社会のジェンダー構造』勁草書房
 - ・多賀太 (2005) 「男性のエンパワーメント?—社会経済的変化と男性の『危機』」、『国立女性教育会館研究紀要』、9: 39-50
 - ・高橋重宏他 (1994) 「父子家庭施策のあり方に関する研究(1)—302市区町の現行施策等の実態調査—」『日本総合愛育研究所紀要』、31: 69-77
 - ・山田昌弘 (2004) 『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く』筑摩書房
 - ・矢澤澄子 (2012) 「男性の家族扶養意識とジェンダー秩序」、目黒依子他編 『揺らぐ男性のジェンダー意識』新曜社、167-191